

行政のPRの複雑性

作家 童門冬二

戦争の正当性説明は“PR”の一環

前号で紹介した“広告の鬼”と呼ばれた吉田電通社長の「PR」という本は、キチンと読めば現在でもひじょうに役に立つ。

最初の方にこんなことが書かれていた。

太平洋戦争を始めてすぐ日本政府は有能な職員を有力国へ派遣した。

「この戦争のやむを得ざる理由の説明と、その国の理解と協力を得る」のが目的だ。

アメリカへも派遣された。まだ参戦前だったのでアメリカも一応会ってくれた。

日本側の説明を聞いてこう応じた。

「ご説明は伺いましたが、その理由では日本の中国侵略の正当性を納得することはできません」と拒否した。そしてこうつけ加えた。

「アメリカではあなたの今回のようなお仕事を“PR（パブリック・リレーション）”と呼んでいます。専門の企業もあります。ご紹介しますからお会いになったらいかがでしょう。お国のご参考になると思います」

開戦寸前だというのにずい分親切な職員だと思ふ。日本政府の職員は紹介された会社に行った。新聞・ラジオ等のマス媒体の広告を一手に扱う大手の会社だった。日本の現在の電通・博報堂のような存在だ。

社長が会ってくれた。最初から、

「ごくろうだとは思いますが、早々に切りあげて

日本へ帰ったほうがいいと思いますよ」

と云った。そしてアメリカ政府職員と同じように、

- ・あなたの任務はアメリカでは“PR”と呼ぶこと
 - ・意味は単なる広報宣伝ではなく、相手側の意識改革を求めること
 - ・これは大変な仕事であり、アウトプット（情報の発信者）にとっても、ぼう大なエネルギーと智力（戦略）を必要とすること
 - ・当然経費も莫大なものになること
- 等と話してくれた。

日本政府の職員（外務省）は賢い人だった

- ・アメリカ側のいうことを完全に理解し、それだけに「自分の任務の失敗」を正直に感じていた。職員は日本に打電報告した。
- 「任務ニ失敗セリ。タダシ当国デハ小官ノ任務ハPRト称セリ」

という内容だった。

職員が感じたのは、

- ・アメリカでは政府広報もマス媒体に依頼し
- ・トップクラスの「記者会見」等によって、国民に対する周知事項を依頼している
- ・この仕事をパブリシテイ（第三者への情報提供）としている

ということである。職員が反省したのは、

- ・自分の説明態度は政府視線（めせん）であって、市民視線ではなかったこと

- ・だから説明内容も終始高飛車であって、“押しつけがましかった”こと
 - ・聞いた方は反撥し、内容もだが告げる職員のそういう姿勢にも好感情を持たなかったということである。
- (このことも「政府広報が戦略だというゆえんなのだ)
- ということも賢明に覚っていた。

行政広報の“自主”と“パブリシティ”

現在の行政広報は“自主広報”と“パブリシティ広報”の二つに分れている。影響力や効果については、自主広報がパブリシティ広報に全く及ばないことはいままでのない。

私にはそのことを如実に経験したことがある。知事が替って間もなく私は広報室長を命ぜられた。新知事の最初の下命は、

「きみ、新聞に折りこむ広報紙をやめないか」ということだった。突然なので、

「なぜですか」と訊いた。知事（みのべさん）は笑った。

「ほとんど読まないからさ。それに新聞を2つも3つもとっている家には、2枚も3枚も行くだろ。勿体ない」

知事は、

「そういう自主広報はやめてパブリシティ広報に切替えなさい」

ということなのだ。私は詰った。知事のいうことはわかる。しかし毎月セッセとネタを集め記事にしている職員のことを考えると、「わかりました、さっそくやめます」とはいえない。

行政広報には義務広報もある

「ちょっとお時間下さい。職場で相談します」

「そうして下さい」知事は時間をくれた。職場で相談しても結果は知れている。

「“都のお知らせ（折りこみ広報紙）”は、広報室のいのちです。室長、死守して下さい」

と迫られた。私はその通りのことを知事に告げた。「もし“お知らせ”をやめたら、職員に私がクビにされますから、どうか継続させて下さい」と頼んだ。そして、

「行政広報にはパブリシティには馴染まないものがある、都民が読まなくても都としては義務として知らせなければならないものがあること（政府の官報で扱うもののような）」

を強調した。知事は笑った。そして継続を認めてくれた。以後知事は何代も替ったが“都のお知らせ”は変わりなく新聞に挟まれて届けられている。しかし広報の主体がパブリシティに移行し、特にトップの記者会見がニュース提供の源泉になったことは事実である。これは政府も同じで官房長官の定例会見がその役割を果している。

私の主務も変わった。1日のほとんどはマスコミ記者との雑談になった。トバせる（他紙や他テレビを抜く）特ダネを狙ってさりげなく冗談話にまぎらわせる記者とのやりとりは

（これも戦略かな）

と思うこともしばしばあった。

そのためつぎに感じたのが、

「何を、という広報（ニュース）の内容を、輝やかせるのも光りを失なわせるのも、発信者の風度（ふうど）だ」

と思いはじめた。

「風度」という言葉は辞典にもあまり載っていない。歴史書の古い本（『名将言行録』など）で散見する。一言でいえば、

「相手をその気にさせるこちら側のオーラ（気）のこと」だ。

「名将言行録」などでは、部下が心服し、その言を信じ命令に従う動機を「風度があったため」と説明している。

孔子や後藤新平についてもこのことが云える（この項つづく）